

頻発する自然災害

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。発生した平成23年から7年が経ちました。ここ2年ほどを振り返ってみても、平成28年4月の熊本地震、平成29年7月の九州北部豪雨、同じく7月の秋田県豪雨など、自然災害は後をたちません。平穏な日常の中でも常日頃から防災や減災の心

構えを忘れず、いざという時の備えを万全にしておくことが大切であると、誰もが心にとめるようになりました。大口町内でも、地域自治組織主催で毎年工夫を凝らした防災訓練がおこなわれるなど、行政に頼らない民間レベルでの備えを心がける流れが徐々に作られつつあります。大口町では、東日本大震災のあった翌年、平成24年に総務省の要請に

より行政機能をサポートする職員が派遣され、翌25年からは町独自の判断で職員を派遣する支援を継続中です。現在派遣されている渡邊大介さんは、平成24年4月に第1回の派遣職員として被災地の一つである南三陸町に赴き、今回で2度目の派遣になります。現地で実際に生活しながら約1年勤務した貴重な体験談を伺いました。

「渡邊さんのように、支援の一環として南三陸町に派遣されている職員は全国から80名ほどいらっしゃるそうですね。普段従事している仕事内容や、職場での交流の様子などについて教えてください。」

大口町の派遣職員は代々、南三陸町教育委員会教育総務課で主に小学校に関する仕事をしています。

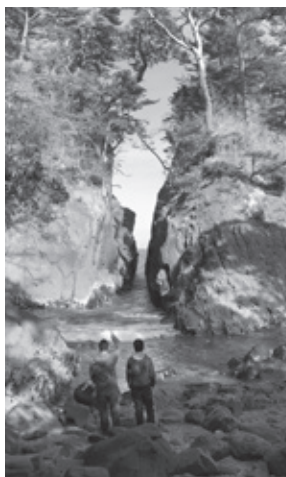
例えば、住宅が被災したことで別のところに引っ越したために転校する必要があるけれど、そのまま同じ学校に通い続けたいといった場合の手続きや、住宅が全壊や半壊となった家庭や、震災の影響で収入が大きく減ってしまった家庭の小中学生の保護者の方へ、学用品の購入費用や学校給食費などを支給する就学援助のほか、スクーリングの委託業者や学校との連絡調整といった業務をおこなっています。今年度は南三陸町の今後10年の教育の指針となる教育振興基本計画の策定にも関わりました。

また、大口町の姉妹都市である島根県松江市から岩手県陸前高田市に派遣されている職員の方の依頼で、陸前高田市の産業まつりに出展した松江市PRブースのお手伝いをさせていただきました。

仕事以外では、他の部署にいる同

東日本大震災発生から7年

大口町は、東日本大震災発生後の平成24年4月から、大口町の人口約2万人と規模がほぼ同じ南三陸町へ毎年職員を1名派遣しています。今回の特集では、現在、7人目の派遣職員として南三陸町役場に勤務している渡邊大介さんに、7年たった現在の復興の様子を伺いました。



▲観光スポットの神割崎
南三陸屈指の景勝地 大きく割れた岩の間から波が押し寄せる姿が圧巻です。

▲田束山は5月の上旬には真っ赤なツツジが山頂付近を彩ります。南三陸町の他にも宮城県には素敵な観光地と美味しいものがたくさんあります。



▲様変わりするまち並み

今もなお かさ上げ工事が 進む南三陸町



じく派遣できている他市区町村職員や地元の職員の人たちと不定期で美味しいものを食べに行ったり、学校の先生方と定期的にゴルフをしたりと交流を深めています。

一渡邊さんは平成24年4月から9月まで派遣され、今回で2度目ですが、前回の派遣とくらべた町の復興の様子を教えてください。

前回は、震災の翌年ということも



▲南三陸町役場新庁舎



▲さんさん商店街



田東山
たつがねさん

▲宮城県本吉郡南三陸町と気仙沼市にまたがる田東山山頂



▲松原食堂 イクラ丼

あって、瓦礫の山や基礎だけになった建物の跡など、震災の爪痕を大きく残す光景がたくさんあり、瓦礫などの災害廃棄物の処理が優先的にこなわれていました。当時は、復興するのの一体どれくらいの時間がかかるのか想像もつかない状況でしたが、毎年訪れるたびに大きく変化していく町の姿を見て、思いのほか早く復興が進んでいると思いました。

そして、昨年度末には住宅再建の

基礎整備が完了したこともあり、造成された高台には災害公営住宅が整備され、一般の戸建住宅の建設も進んでいます。その結果、町内外の仮設住宅も徐々に整理統合されているところですよ。

昨年7月には生鮮食品を扱うスーパーを併設した大型商業施設がオープンしたほか、飲食店やコンビニエンスストア、衣料品店などの小売店も増えてきており、住民のみなさん

の生活の利便性は回復してきています。また、被災後は仮設だった役場本庁舎や支所も新しく生まれ変わったほか、志津川地区と歌津地区の仮設商店街も新しく生まれ変わり、週末は大勢の人で賑わっています。

しかし、その一方で防潮堤、漁港、河川の護岸、国道などのインフラについては引き続き大規模な工事がおこなわれており、工事現場には多くの大型重機が見られ、休日返上で工事がおこなわれることもあります。

「まだ地震は頻繁に起きていますか？ 大口町でも各地域自治組織などが災害に備え訓練をしています。南三陸町の皆さんが現在されている防災や減災への取り組みを教えてください。」

前回ほどではありませんが、月に1〜2回程度の小さな地震はあります。

防災や減災については、小学校や中学校で防災教育が積極的におこなわれており、ある小学校では、地域住民と学校が協働で防災教育に取り組んでいます。町内の小中学校では少年消防クラブを立ち上げて防災教育に取り組んでいます。

「被災地で実際に生活してみて、渡邊さん自身の防災意識は変わりましたか？ 災害への備え、または被災した後の生活で大切だと思ったことは何ですか？」

東日本大震災のような未曾有の災害の場合、職員も被災して身動きが取れず行政機能が麻痺することも想定されるため、役場などの行政機関に頼れない可能性があることも認識しておく必要があると思います。困った時はお互い様の精神で、日頃から地域のコミュニティを大切にし、近隣の人たちとのつながりを築いていくことが大切だと思います。

当たり前のことですが、災害への備えとしては、水や食料はもちろんのこと最低限必要となる日用品の備蓄をし、誰の助けがなくても数日間生活できるだけの準備をしておくことが肝要です。備蓄という場所もとり面倒だなと思われる方もいるかもしれませんが、日頃から3日分程度の水や食料をストックし、それを使ったら補充することを繰り返すだけで良いと思います。

被災した後の生活と一言で言ってもどの時点のことかというのがありますが、被災した直後の生活で大切なこと

は、体調管理と衛生管理でしょうか。例えば避難所生活を余儀なくされる場合においては体調を崩しやすくなるでしょうし、ごみやし尿処理も恐らく通常のようにはできません。これが原因となつて体調を崩すケースも想定されると思いますので、衛生管理には特に注意を払うべきだと思います。

「公助（行政の助け）より共助、自助（隣近所や自らの助け）がいざというときに命を助けるというのは、昨今災害への備えの中で叫ばれている最重要事項ですね。何も起こらない日常から、自分の身は自分で守るという意識を持ち、有事に備えるシミュレーションをしていかなければなりませんね。」

では最後に、私たちが今できる被災地支援は何でしょうか？

やっぱり一番なのは、現地に行って被災の状況や復興の様子を見ていただき、実際に肌に触れて感じていただくことではないでしょうか。現地に行けばそれなりにお金も使っていただけだと思いますので、今の段階までくると支援というより、応援という表現の方が良いかもしれません。

取材にて

南海トラフを震源とした巨大地震の発生率が年々高まる中、大口町に住む私たちの間でも防災、減災の意識は徐々に高まりつつあります。ここ数年言われ始めていることは、いざというときは避難所が必ずしも万全ではなく、可能であれば自宅避難も想定に入れなければならないということなんです。「自分の身は自分で守る」ことを肝に銘じ、災害に対する知識を深め、備えを心がけることは、被害を最小限に抑えるために一番大切なことであると、現地で実際に被災地を体験した6名の派遣職員の皆さんは毎年口をそろえておっしゃいます。自分と家族を守るために日頃の備えとして何ができるか、渡邊さんの体験談をきっかけに今一度、確認しておきたいものです。

最後に、前任者の大塚さんや渡邊さんおすすすめのお土産、「たつのこのり太郎」「珍珠」オーイング菓子工房さんの「お山のマドレーヌ」をお取り寄せしてみました。マドレーヌは、卵の濃厚な香りとしっとりとしたやさしい甘さが口いっぱい広がり、紅茶やコーヒーにぴったりでした。

大口町には南三陸町の宿泊助成をおこなうリフレッシュリゾート制度があります。

対象施設	岩手県遠野市観光協会加盟施設 宮城県南三陸町観光協会加盟施設
助成金額	一泊のみ 2,500円 上記に合わせて航空運賃補助 2,500円 ※名古屋小牧空港発着いわて花巻空港便のみ対象。(ただし、上記施設をご利用時のみ) 問合せ先 生涯学習課 95-3155



南三陸 de お買い物